

賛否論

「少年団や部活動の勝利至上主義、どう考える？」のテーマの最終回となります。指導の現場はこれからどうあるべきか。大人の暴言や暴力から子どもを守るために、何ができるか。県外在住の読者の方々からも、参考となる意見が数多く寄せられました。5月6日付の「有識者インタビュー」で登場いただいた富田寿人・静岡理工科大情報デザイン学科長からも、読者からの投稿をご覧ください。最後にご紹介します。

■「野球留学」の悪影響 ■指導者が進化を ■学校の宣伝の道具に ■まず楽しさ知って

読者 羽衣国際大スポーツコース教授・羽衣学園高野球部監督 朝西知徳さん(堺市) 56歳

高校野球における「野球留学」は、勝利至上主義を扇動しているといえるでしょう。2005年、日本高校野球連盟から全国の高校に対して「中学生の勧誘行為の自粛」について通達がありました。そこには「中学生を勧誘することは、本人に『野球だけをすればよい』などと誤った優越感や特権意識を持たせることになり、精神面への悪影響は計り知れません」「いかなる場合でも高校側の指導者や関

係者が中学生を勧誘してはいけない」と明記されています。残念ながら、守られていません。学校の宣伝や指導者のメンツのために選手勧誘をすることは、生徒を勝つための道具にしているに過ぎません。商売に利用しているだけです。苦し紛れに「教育」を掲げても、「看板に偽りあり」というケースも目立ちます。

鳥取県の米子商業高(現米子松蔭高)で監督をしていた2000年、「梨100%」で夏の甲子園に出場したことは誇りです。甲子園に出場したことはなく、「すべて鳥取っ子」だったことが誇りなのです。

読者 笑っ人さん(岐阜県各務原市) 39歳

2021年10月から愛知県の地域総合型スポーツクラブで小学生にバレーボールを教えています。19年度までは九州地方で女子小学生チームを教えていました。20年までは小学生と中学生の娘が岐阜市と各務原市でバレーボールをやっていました(少年団と部活動)。

九州での活動では全国大会や九州大会を目標にするチームでした。僕自身は保護者コーチとして指導していました。監督は校長先生でベテランです。遠征や合宿は当たり前でした。人間力を向上させてくれる一面は多々ありました。ただし、けがが多く練習時間は長かったです。少

年団の推奨している時間は超えています。岐阜でも、部活動や少年団で暴力暴言は当たり前でした。保護者容認です。九州時代と変わらず、全国大会のための遠征も多かったです。

指導者と話をすると「過去」や「他チーム」との比較をします。「昔よりは良い」「他のチームはもっとやっている」などと、焦点は子どもではありません。目的が子どもの育成ではなく「組織を守ること」「自分を守ること」になっていると感じます。指導者(顧問)が変わるべき(進化するべき)と考えています。

われわれの声は協会には届きません。体罰はあふれています。

読者 三重県在住の男性(42)

30年前、三重県の中学でサッカー部に入っていました。顧問から認められれば毎試合出場することができ、そうでないと年間1試合も出られない。出られるとしたらレギュラーが昼ごはんを食べる間に、屈辱的に下級生に交じってB戦に出られるのみでした。なぜ、レギュラーじゃないか、何をすべきかなど何も説明は無し。暴力まで振る顧問でした。レギュラーは試合経験が豊富になるのでどんどん差が開きました。顧問とレギュラーだけ楽しければよいとしか補欠の私には受け取れませんでした。

勝利至上主義で補欠に冷たい暴力教員

読者

40年以上スポーツ少年団で剣道を子どもたちに教えています。今回柔道が「行き過ぎた勝利至上主義」を懸念し、全国大会を廃止する方向に向かった。これには私も賛成です。

ご多分に漏れず、われわれの剣道も少子化や、メジャーなスポーツに押されて競技人口は少なくなる一方です。われわれの部では、まず子どもたちに剣道の楽

が定年近くで校長になるのは納得できませんでした。25年ぶりにたまたま会って「レギュラーは毎週のように試合(晴れ舞台)に出られて、そうでないと出場ゼロに近いのはおかしくないか?」と詰問すると、「忘れた」と言われました。

やはり高校野球や高校サッカー、大学箱根駅伝などに対するマスコミの過熱報道に親や学校も同調し、子どもが学校の宣伝の道具になっているのに気づかないのでしょうか。学校対抗戦がテレビで盛り上がりつつあることについて、欧州の人たちは「日本は異様だ」と言うそうです。指導される生徒と親が、ばかげていると気づくべきです。

しさを知ってもらうことを目的にしています。飽きさせず、楽しんで取り組めるように工夫しています(遊びを取り入れた練習など)。また、スポーツは剣道だけでなく、水泳、野球、サッカー等なんでも好きなスポーツを勧めています。バランスの取れた筋肉の発達を目指すために。指導者が大会の良い成績のみを求めないという意識に変えていくことが第一だと思います。

少年団や部活動の勝利至上主義、どう考える?

#7

読者の意見

■健全育成肝に銘じて ■子どもが求めているものは

読者 ぼちさん(県中部地区) 50代

キュレーターの方の意見の中の「大人の問題」という言葉を見て、まさにその通りだなと思いました。スポーツ少年団にしても部活にしても、そこに関わる大人の意識の問題だと思います。

少年団が悪いわけでも部活動が悪いわけでもありません。勝つことを目指すのも悪くありません。問題なのは、そこで大人が「少年団や部活は子どもの健全育成や教育の一環としての活動である」ということを肝に銘じて関わっているかどうかではないでしょうか。

少し年齢が上になりますが、大学駅伝

の青山学院の原晋監督は「自主性を尊重し、人を育てる指導」で結果を出し、その指導法が目されるようになりました。原監督には結果を出すことが求められていて、勝つことを目標にしての指導なのに「勝利至上主義」との印象はありません。

大人は「子どものため」と言いながら、自分の自己実現のために子どもを利用してしまいがちです。「人の為(ため)」と書いて「偽」。子どものために…という気持ちが湧いてきた時には、一度立ち止まるのが大人には必要なかもしれません。



有識者 富田 寿人・静岡理工科大情報デザイン学科長
県スポーツ推進審議会会長や日本スポーツ少年団活動開発部会長などを務める。磐田南高陸上部出身。

キュレーターおよび読者からのご意見は、どれもそれぞれの立場から子どものスポーツの現状を切り取った貴重なご意見だと感じました。これらを拝読して感じたことを述べます。

勝つために、上手になるために努力するのは尊いことです。その過程の中で起こった変化を、大人は評価してあげてほしいのです。試合に負けることで、その全てが否定されてしまうのが勝利至上主義です。勝ちを求めるあまり、一度も試合に出ることがない子ども。ミスに暴力・暴言を浴びせられる子ども。指示通りに動くことを求められ、考えることをやめさせられる子ども。いずれも、子どもが求めているものではないはずです。スポーツにどのように取り組むかは子どもが考えるもので、大人が与えるもので

はないと思います。私はスピードスケート・ショートトラックのナショナルチームの強化に長く携わったことがあります。まさに勝利が求められる場所でした。選手たちが多くの犠牲と我慢を強いられる中で練習や試合をしているのを見てきました。勝たなければ意味がない、結果がすべてという勝利至上主義が、発育発達に大きな個人差のある児童期に本当に必要だと思いますか?

今回の全柔連の決断は、「スポーツの価値・楽しさとは何なのか?」を問いつける大切な機会を与えてくれたとも考えられます。日本スポーツ少年団は、各競技団体と協議しながら全国大会のあり方について検討を始めるところです。